

サ

ントリー美術館（東京・港区）で開催中の「葛屋重三郎展」に行ってきた。浮世絵師の喜多川歌麿や東洲斎写楽を世に出した版元として知られるが、挿絵入りの娯楽本を大量に出版し、江戸時代中期の庶民文化における一大プロデューサーであった。

よく、今の日本社会が江戸時代と似ているとの指摘がなされるが、江戸時代の中でも、この18世紀後半になぞらえるのがふさわしいのではないかと思う。

戦国時代ははるか昔、世の中は安定する一方で、元禄時代までの経済成長時代は終わりを告げる。質素儉約が説かれる時代に入り、社会には閉塞感が漂う。そして、鎖国の中、外国船が相次いで通商を求め来訪するも、グローバル化への動きは弾圧される。こうした状況は、経済成長が止まり、デフレの中で生活防衛術が叫ばれ、グローバル化の圧力の中で、国内改革が進展しない現在とよく似る。

また、戦国時代は下克上、つまりは能力主義社会であったが、江戸時代は身分が固定されていた。いくら能力があっても親と違う職業には就けず、階層上昇のチャンスはほとんどなかった。階層の固定化が懸念され、非正規雇用になるとなかなか正社員になれず、正社員になればなつたで安心してしまい、海外に行くことを嫌がり、終身雇用と年功序列賃金が続くことを願う人が多い、今の若者の状況に通じるところがある。

経済が停滞し、生活上昇や能力発揮は見込めない、こんな現実生活の閉塞感の中で生きる人々が求めたのは、虚構の世界である。現実のつまらなさを一時忘れるための「夢の世界」といつてもよい。そこに登場したのが、葛屋重三郎なのだ。

虚構を商品化した才覚

当時の男性にとって、夢の世界のナンバーワンは吉原であった。吉原で遊女と遊ぶことは、独身であろうが既婚者であろうが、男性の夢であった。葛屋は、吉原のガイドブックを作り遊女ランキンクを発行し、そして歌麿ら浮世絵師に遊女を描かせた。つまり風俗ガイドブック、風俗嬢ランキンク、風俗嬢のプロマイドを作ったのだ。もしかしたら裏で枕絵、つまりポルノも売っていたかもしれない（今回の展示にはなかったが）。

男性でも吉原にしょっちゅう行けるわけではない。ガイドブックやプロマイドを見ながら、夢の世界に行くことを想像して楽しんだ人も多かったに違いない。葛屋は、夢の世界に浸ることをサポートする産業に目をつけたのである。

女性にとつての夢の世界は、歌舞伎だったのだろう。葛屋は、当時の最新技術の多色刷りで歌舞伎役者の豪華なプロマイドを作り、こちらでも大成功を収める。ひいきの役者の浮世絵を買って帰れば、家の中でも夢の世界の雰囲気味わえたのである。今でいえば、スターのD

THE COMPASS

[コンパス]

成熟社会の行く末

「虚構」にあこがれ 内にこもる日本

●中央大学文学部教授

山田昌弘



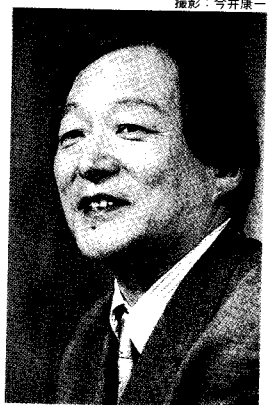
「青楼十二時 続 午ノ刻」喜多川歌麿画 (1794年ごろ)。鳥屋重三郎は江戸庶民の夢を商品化した

日本全体が夢に逃避する

先日、ある地方都市に調査に行ってきた。シャッター通り商店街が広がり、経済的には停滞感が漂っている。夜になると、一角だけネオンがきらきらしている場所がある。いわゆる歓楽街である。近隣地域の男性が、給料やアルバイト料を貯めて年に数回、来て楽しむ場所となっているらしい。地元で親と同居している独身女性にインタビューすると、休日はほとんど映画のDVDを見て過ごすと言っていた人もいた。スターの追っかけをしている人もいた。まさに、夢の世界での楽しみを求めている。

V Dやネット動画の販売であろうか。そして、庶民向けの挿絵入り小説を大量に発行したのは、ケータイ小説の興隆とそっくりである。「夢の世界に浸る」という楽しみのある方は、今の社会に通じるものがある。

日本全体に、夢の世界に浸ることを求める人が広がっている気がする。特に、非正規雇用者はそうである。単純で不安定な雇用で就く彼らは、現実の世界で昇進の機会もなければ、生活水準を向上させる望みもない。未婚で親と同居していない。一人暮らしでぎりぎりの生活をしているのなら、将来のことなど考えもしないだろう。そのような彼らが夢の世界を求めているのは、ごく当然のことになる。私がインタビュー調査した非正規雇用者たちの中で、メイドカフェに行くという人はいたが、風俗店に行くという人はいなかった。しかし、先日、死刑判決が出たひざ枕耳かき店殺人事件の容疑者のように、アルバイト料を握り締めて風俗店通いをする人もいると聞く。実際に外に出て足を運ばなくても、アニメやネットゲームなど、現実とは離れた夢の世界に浸るためのメディアはたくさんある。



撮影: 今井康一
やまだ・まさひろ ●1957年生まれ。東大大学院修了。専攻は家族社会学、感情社会学。「なぜ若者は保守化するか」など著書多数。

女性では、貯めたアルバイト料でスターの追っかけをし、おカネがなくなると親元に戻ってバイトする生活を数年続けている未婚者を調査したことがある。既婚者でも韓流スターやジャニーズにはまる人も多い。あるジャニーズスターの追っかけを

している未婚中年女性は、自分の息子を応援しているみたいで楽しいと語っていた。つまりバーチャルな家族の夢の世界に浸っているのだ。テーマパークで一人勝ちしているディズニーランドも、現実と隔絶された夢の世界に一日浸ることができるから、人が集まるのだ。とすれば、いま日本で元気があるといわれている産業は、夢の世界に浸ることをサポートする産業ばかりといえないだろうか。アニメ、コスプレ、ネットゲーム、パチンコしかりである。しかし、そのような状況であっても、現実の社会をよくするという動きには、なかなか結び付かない。江戸時代は、内側からは大塩平八郎の乱などで不安定化し、外からは欧米列強の圧力が強まり、最終的には消費に浮かれない地方の雄藩から改革の動きが始まった。今の日本の停滞は、どのように打破できるのだろうか。文化だけが残るといふことにならないといいけれど、と展覧会を見ながら考えた。

「最小不幸社会」の幸福のあり方とは 幸福論

山田昌弘 中央大学教授

先月、菅新総理大臣は、就任会見で「最小不幸社会」をめざすことを宣言した。ただ、不幸がないことと幸福を感じることは意味が違う。現代日本社会は、リストラされる、孤獨死するなど、不幸な未来ならいくらでも思い描けるが、こうなれば幸福であるという積極的な目標を想像しにくい状況にある。だから、菅首相も最大幸福とは言えなかったのであり、さまざまな幸福論が世を賑わしているのも同じ理由からだ。ここでは、幸福論が流行している理由を考えるための五冊

を紹介しよう。

まず、従来幸福のシンボルとされていた経済的に豊かな生活が、幸福と結びつかなくなっている現実を描き出している対談本二冊を取り上げよう。一つは、心理学者・小倉千加子と中村うさぎによる『幸福論』(二〇〇六)である。小倉は、買い物依存と同じく豊かな結婚生活に「はまる」ことで幸福を得ようとすることは、依存症(専門的に言えばアディクション)の一種であることを強調する。逆に言えば、一昔前経済状況がよい時は「はまったまま」

不幸に気づかず一生を終えることができたのである。現在、経済停滞により、ブランドものを買い続けること、結婚して豊かな生活を送ることが不可能な時代になったので、依存による幸福を許されない状況が生まれているとも言える。

勝間和代と香山リカによる『勝間さん、努力で幸せになれますか』(二〇一〇)も、生きづらくなった時代の幸福について考えさせられる。対立しているように見えて、二人は、日常生活で感じるささやかな幸福をめざすという点で共通している。しかし、収入が十分ないとささやかな幸福でさえ感じる余裕がなくなるという現実を目前にして、勝間はとにかく十分な収入を得ることで安心を得ることを勧め、逆に香山は安心を得るための努力がかえって不安を煽ることを精神科医の立場から説く。

二冊とも、幸福をめざすカリスマ的リーダー二人、片や消費によって身体

的快楽を追求する中村うさぎ、そして効率的に仕事をする身体を追求する勝間和代を、小倉と香山が心理学的観点から批判するという点で共通している。ただ、心理学では、身体的快楽や努力による成功では幸福になれないことを明らかにできても、それに代わる積極的な幸福の提言に関しては弱いのも事実である。

社会哲学者・パウマンは『幸福論(原題 The Art of Life)』(二〇〇九)において、経済的に豊かになることと幸福という図式が成り立たない時代が本格的に到来したことを告げている。

物質的に快適な生活だけが幸福ではないという議論は、古代ギリシア時代から綿々と続いている。最近では、ベトナム戦争でアメリカ経済に暗雲が漂っていた一九六八年、ロバート・ケネディ(J・F・ケネディの弟)が暗殺される直前の演説で、経済的豊かさでは計れない幸福指標を作ろうと提言している。経済が行き詰まり、将来生活に不安を持つ時期に、「幸福論」が流行するようだ。

では、経済的豊かさでは計れない幸福とは何か。ヒルティ、ラッセル、アランといった超一流とは言えない哲学

幸福論を知るための5冊

「幸福論」

著◎小倉千加子・中村うさぎ
岩波書店 1575円

「勝間さん、努力で幸せになれますか」

著◎勝間和代・香山リカ
朝日新聞出版 1050円

「幸福論」

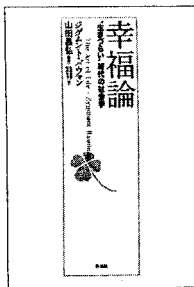
著◎Z・パウマン
訳◎高橋良輔・開内文乃
作品社 2520円

「道徳形而上学原論」

著◎I・カント 訳◎篠田英雄
岩波文庫 630円

「幸福の方程式」

著◎山田昌弘・電通チームハビネス
ディスカヴァー携書 1050円



最後に、今後の幸福のあり方の試論として、拙書『幸福の方程式』(二〇〇九)を参考にしていただければ幸いです。

やまだまさひろ 一九五七年東京都生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程退学。専門は家族社会学。著書に「婚活」現象の社会学「なぜ若者は保守化するのか」など多数。